

月刊物流の灯台



キーパーソンのための物流*フリーペーパー

第2巻 第6号 (2012.6.1発行)

*本誌では物流を、ロジスティクス、SCMを包含した
“物資供給システム”の意味で使用しています。

発行:「次世代物流*探査ワークショップ」事務局

〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-17-11

パークハイツ池袋307号 ㈱拓洋・東京支店気付

事務局長:小林 勝美 (kkoba1119@yahoo.co.jp)

編集担当:津久井 英喜 (hide_tsukui518@yahoo.co.jp)

渉外担当:中村 奎吾 (keinaka@msi.biglobe.ne.jp)

研究担当:藤田 昱也 (fujitaik@zf6.so-net.ne.jp)

****バックナンバーは <http://ameblo.jp/colloquium/> でご覧になれます**** (50音順) ****

【今月の問題提起】

圏央道開通の先にある“これから”を考える
～社会システムの開発にどう取り組むか④～

津久井 英喜

僕もカミさんも昭和13年(1938年)生まれの“新宿育ち”です。

小学校はカミさんが淀一(区立淀橋第一小学校)、僕が淀四(区立淀橋第四小学校)、中学は二人とも淀中(区立淀橋中学校)を卒業しました。

カミさんは都立駒場高校に進学しましたが、僕は地元の都立新宿高校でしたから、卒業するまで“電車”とはおよそ縁のない暮らしでした。

半世紀以上も昔のことですが、あの頃の新宿は今の八王子市以上に“職住”が近接していました。

それがこの半世紀、凄まじい勢いで“ビジネス街”に変貌していきました。

15年ほど昔になりますが、小学校の同窓会があって、同学年で新宿に住んでいるのは寿司屋を継いだY君だけだということを知りました。

==もくじ=====

【今月の問題提起】

圏央道開通の先にある“これから”を考える
～社会システムの開発にどう取り組むか④～

津久井 英喜 …1

僕自身も例外ではなく、江東区に移り住んで37年になります。

それでも新宿が、僕らふたりの共通の“ふるさと”で、思い出したように新宿高島屋の上階にあるレストランから「見覚えのある場所を探す」ようなムダなことをしたりもしています。

実は先日、新宿高校のPTA広報部から「同窓生シリーズ」欄に寄稿せよとの依頼があったのですが、思い出の場所はもはや跡形もなくなっていました。

地名も“柏木”が北新宿に変わり、“淀橋”は大型家電販売店の店名にしか名残りを残していません。

業平橋駅が“とうきょうスカイツリー駅”へ改称されたように、文化を踏みつけにしての経済至上主義への傾斜は止まりそうもありません。

「誇りある地域の創造」「安全・安心の暮らしの確保」「恵み豊かな自然の享受」といったコトバは、もはや「活力ある経済社会の構築」という大命題の前では刺身のツマほどの力もないようです。

いったい私たちは今どんな社会を目指そうとしているのでしょうか?

(次ページへ)

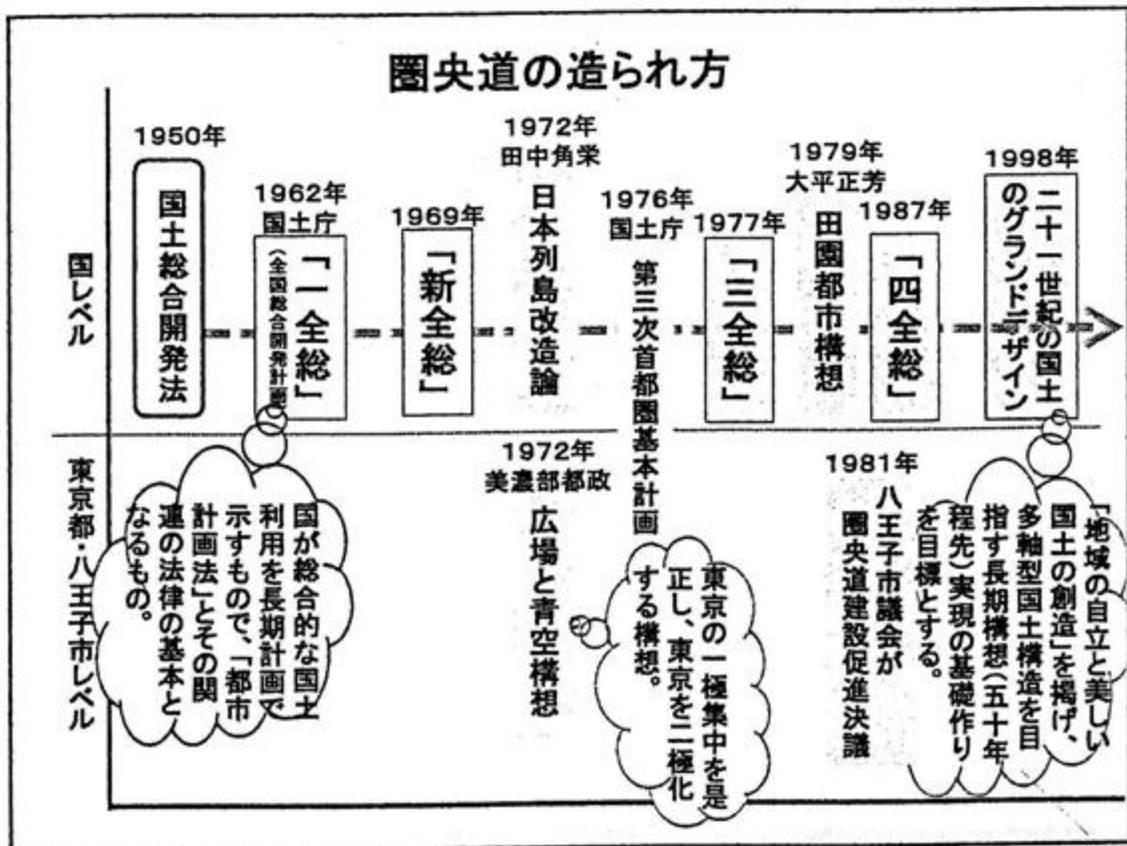
==目次=====

【転載】江戸社会の知恵にすべてのヒントがある

津久井英喜…4

「次世代物流コロキウム」報告(1～3回分) …7

事務局日誌 ……8 スタッフ後記 ……8



一国の総理が語る「国土開発ビジョン」

是正」ということになります。

日本という国土を開発する上で、最も基本となっている法律が、戦後すぐに制定された「国土総合開発法」(1950年制定)です。

これを基にして「国土利用計画法」(1974年制定)、「首都圏整備法」(1956年制定)等が制定されています。

この「国土総合開発法」に基づいて策定された最初の国土開発計画が、池田内閣で閣議決定された「全国総合開発計画(全総)」(1962年)です。

この「全総」は、その後、時代の経過とともに「新全国総合開発計画(新全総)」(1969年、佐藤内閣)、「第三次全国総合開発計画(三全総)」(1977年、福田内閣)、「第四次全国総合開発計画(四全総)」(1987年、中曽根内閣)を経て、現在の「21世紀の国土のグランドデザイン」(1998年、橋本内閣)に至っています。

これらに貫かれている課題は《国土の均衡ある発展》で、具体的には「人口と産業の大都市集中化の抑制」と「地域間の経済格差の

一国の総理たる者、最初の施政方針演説では「自分は日本をこのような国にしたい」という自らのビジョンを必ず語っています。

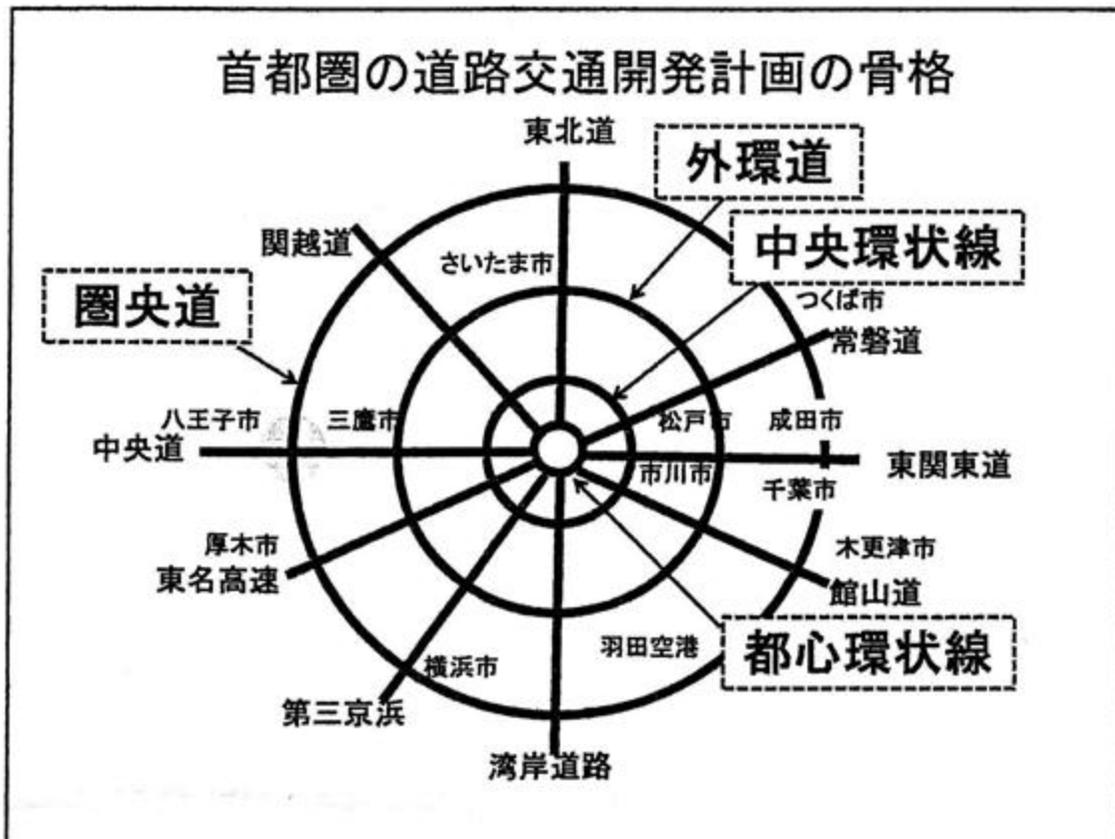
次にご紹介するのは、大平正芳(1910~1980)総理の就任演説(1979年1月)の一部です。

——私は、都市の持つ高い生産性、良質な情報と、民族の苗代ともいべき田園の持つ豊かな自然、潤いのある人間関係を結合させ、健康でゆとりのある田園都市づくりの構想を進めてまいりたいと考えております。

緑と自然に包まれ、安らぎに満ち、郷土愛とみずみずしい人間関係が脈打つ地域生活圏が全国的に展開され、大都市、地方都市、農山漁村のそれぞれの地域の自主性と個性を生かしつつ、均衡のとれた多彩な国土を形成しなければなりません。

私は、そうした究極的理念に照らして、公共事業計画、住宅政策、福祉対策、文教政策、交通政策、農山漁村対策、大都市対策、防災対策等、もろもろの政策を吟味し、その配列を考え、その推進に努めてまいります。——

首都圏の道路交通開発計画の骨格



道路だけでは解決できない本質的課題

東京及び首都圏の道路計画に限れば、今から40年前に《目指すべき将来像の骨格》が示されました。

これは、中心の都心環状線の外側に環状に走る「3環状道路(3環状)」と、9本の放射線道路(9放射)とで構成されるネットワークで、「3環状9放射ネットワーク構想」と呼ばれているものです。

圏央道・八王子は、【上図】が示すとおり、圏央道と中央道とが交叉する所であり、北上すれば関越道に、南下すれば東名高速にもつながり、海外窓口の空港・港湾とのアクセスにも便利な「物流・人流の要地」で、これ程の好条件を備えている所は他にありません。

ここ東京西南部地域は「流通業務市街地の整備に関する法律(流市法)」の下で、1966年以来、東京圏における大規模物流拠点の整備対象地域の一つとして位置づけられ、長い間その実現が望まれてきた所です。

東京都の地形は、東西に横たわった「さつま芋」に似た形をしています。

右端には東京湾に面したゼロメートル地帯(江東区・江戸川区)が、左端には高尾・景信・陣馬に連なる山稜地帯があります。

人口の点でも経済の点でも、右辺にある都心に極端なまでに傾き、集中化しています。

さらに困ったことには、ほぼ中央に立川断層が走り、東京都を東西に分断しています。

もし首都直下地震が発生するようなことにもなれば、倒壊建物が幹線道路をふさぎ、そうでなくとも地盤が弱く、人口過密な都心を中心にして広範囲に甚大な被害が出るのが心配されます。

東京都の「一極集中化の是正」「二極化」に本気で取り組まねばならない時が来ています。

第二の極としての最有力候補地が圏央道・八王子ですが、東京都の二極化とは、道路網の整備促進や、都心が持つ一部機能の移設だけで済むような単純なことではないのです。

(つづく) ■

江戸社会の知恵にすべてのヒントがある

～これからの物流・ロジスティクスのあり方を探る～



津久井英喜

(日本物流学会理事、元・諏訪東京理科大学教授)

かつてモノを大切に使う 循環型社会があった

信州の冬は寒かろうとカミさんから贈られたカシミアの徳利襟のセーターを愛用している。

12月に入って取り出したところ、肩のところに少しほつれが見つかった。

最近ワイシャツのボタン付けくらいにしか使わなくなった裁縫箱を取り出して、カミさんが繕ってくれた。

そういえば5年ほど前に、ダブルのスーツの肩のところにゴマ粒ほどの虫食い穴が3つもあいているのを見つけて、かけはぎをしてくれる仕立て屋を探したことがあった。

探すとするとなかなか見つからないものだが、あるとき、東京海洋大学（江東区越中島）に行く途中の牡丹町で「かけはぎ、やります」の吊り看板を見かけた。

数日後にスーツを持って訪ねたところ、「職人さんに見積ってもらわないと正確なところはわからないが、1万円はかかる」と言われた。

かけはぎは共布を使用して一本一本織り込んで傷跡を残さないように補修する技術である。

つぎはぎとは違って熟練した職人が時間をかけて行う仕事だから、費用がかかるのは致し方ないことだ*。

そのときは予想していなかった値段にすっかり驚いて、それほど上等なスーツでないことを理由にかけはぎを頼むのは諦めた。

*昨今はインターネットで「かけはぎ専門店」のホームページにアクセスできるが、実勢価格はぼくが聞いた料金よりはずっと高いようである。

石川英輔著『大江戸リサイクル事情』（講談社文庫、1997年刊）によれば、江戸時代は提灯の張替え、錠前直し、算盤（そろばん）屋、羅宇（らお）屋、印肉の詰替え、眼鏡屋、炬燵（こたつ）のやぐら直し、鋳掛け屋、瀬戸物の焼き接ぎ、下駄の歯入れ、籠（たが）屋、鏡研ぎ、白の目立て、研ぎ屋などといった、実にいろいろな修理業があったそうだ。

それが今では、修理業をそれほど見かけなくなったのは、技術がすすんで修理をする必要がなくなったわけでは決してない。

開国と同時に世界で唯一存在していた「循環型社会」を放棄して、以来、「資源使い捨て文明社会」への道を驀進してきた結果なのである。

このままでは「ごみ大国」になる

日本人は日本列島創成期の昔から明治維新に至るまで、現在とほぼ同じ面積の国土で、“独立して”暮らしてきた。

江戸時代に生きていた人たちは、先人が過去数千年かけて実験を重ねて生み出した知恵を受け継いで、それなりに豊かに暮らしていたのだと思う。

「資源使い捨て文明社会」の限界がはっきりしてきた今、循環型社会に生きていた江戸の人々の暮らしを見直して、彼らの知恵を総点検してみることに意味がある。

そんなことを考えながら、少し昔のことを思い出してみた。

ぼくが子どものころ、と言っても終戦をはさんで前後10年くらいの間のことであるが、まだ鋳掛け屋や研ぎ屋を街で見かけることがあった。

鋳掛け屋とは鍋・釜にあいた穴をふさいでくれ

る職人、研ぎ屋とは切れの悪くなった刃物を研いでくれる職人のことである。

今から30年くらい前であったかと思うが、東京・両国の国技館の辺りで羅宇屋を見かけて驚いたことがあった。

羅宇屋とは煙管（きせる）のヤニをとって煙の通りをよくしたり、場合によっては修理もする。

こんな商売まで復活したのでは「モノが売れなくなって困るだろう」と心配する人が多かるう。

たしかに、技術が発達してモノの寿命が延びているから、今のままでモノが売れない分をサービスで補うというわけにはいかないかもしれない。

しかし、日本の輸出入を、金額ではなく、物質量（トン数）でみると、輸出量は輸入量の2割にも満たない。

大量生産・大量廃棄のなせる業で、輸入の中には比較的少量の残渣しか残さない原油や食糧を含んでいるとはいえ、これでは相当量の物資が国内に溜まっていくことになる。

物資は循環することなく、蓄積していく。

リサイクルがどんなに効果を発揮したとしても、「ゴミ大国」への道を相当なスピードで驀進していることになり、このままでは大変なことになりかねない。

モノだけで売らず、サービスとのセットで売る

もともと商品はモノ（Product）が単独で売れることはごくまれで、必ずなにかしらのサービス（Service）との組み合わせ（Product-Service）で取引されているものである。

ひとつの商品の中でのモノとサービスの比率はいろいろだが、一般的に経済が成熟するにつれてサービスの比率が高くなる傾向がある。

ここで大切なことは、「サービス（Service）を主体とする活動の方が、モノ（Product）を主体とする活動よりも環境負荷を低減させる潜在的な能力を持っている」という点である。

すでに何度も述べてきたことだが、環境問題への対応こそ人類にとっての喫緊の課題である。

そうだとすれば、商品に占めるサービスの割合の拡大を「経済の成熟」だけに任せずに、積極的に拡大していく方策を講ずることである。

こういうことを最近になって環境問題との関係で言い出したのが、オランダの環境コンサルタント会社Pre Consultant社のゲドクープ氏らで、PSS（Product-Service System）と名づけられたコンセプトである。

ゲドクープ氏らはPSSを「市場化される製品とサービスのセットであり、ユーザーのニーズを共に満たしうるものである」と定義した。

ぼくなり考えると、「モノ（Product）だけ売るのではなく、提供する“モノの効用”を最大限に引き出すサービス（Service）の力を借りて問題の解決（Solution）を売る」という考えになる。

すでにあるビジネスであれば、個人向けのレンタカー、貸し自転車、コインランドリー、企業向けのオフィス家具、カーペット・マット、コピー機などのOA機器のリース／レンタルなどが“PPSの芽”で、他にもまだ幾らでも挙げることができる。

修理という仕事もこの範疇に入る。

近所に何軒もある街の自転車屋さんには、新しい自転車の販売ではなく、修理で食べているという。

そういえばバス停の前の喫茶店がいつのまにか「リフォームの店」になっていた。

ぼくが知っている亀丸屋電気商会（諏訪市）では遠方から宅配便で送られてくるモーターの修理もやっている。

セイコーエプソンの子会社のエプソンサービス（松本市、1996年設立）はエプソン製品の修理を専門にやっている会社で、ぼくは何回も修理センターを見学させていただいている。

修理を通じて得た情報、ユーザーからの要求、使用の提案などはしっかりと開発部門へフィードバックしている。

修理をしやすくする工夫も設計部門に要請していて、単なる修理屋に終わっていない。

江戸時代の鋳掛け屋、研ぎ屋が、現代という時

代にあったビジネスの姿に生まれ変わったと考えられなくもない。

その気になって探していけばこのような「新しい動き」はたくさん見つかるはずである。

ヒントはすべて 江戸の暮らしの中にある

前号に、

——環境問題は「経済のソフト化」を促進することになるから、ダウンサイジング、アップグレード設計、シェアリング、リマニュファクチャリング、リペアリング、サービサイジング（或いはPSS）といった、これまでは試行段階にあったものが一斉に実施段階に入ることになる。——と書いた。

このなかのリペアリングは、今回取り上げた修理のことである。

ここに並べたカタカナで書いたコンセプトの多くは、環境問題に熱心に取り組んでいる欧州の国々から紹介されているものである。

しかし、よく読んでみると、「資源使い捨て文明社会」の限界に気がついて、古くともせいぜいこの半世紀の間に生まれたものが多い。

先日、携帯傘の石突（いしづき）をなくして立ち寄ったミスターミニットは、靴の修理、合鍵の作成、かばんや傘の修理などを仕事にして、世界中でビジネスを展開している。

その第1号店は1957年にブリュッセル（ベルギー）のデパートの一角で始めた「ヒール修理サービス店」で、まだわずか50年の歴史しかない。

ミスターミニットが誕生する百年近く昔に、我々の祖先は、資源収奪のために植民地獲得に狂奔していた欧米諸国をモデルであると思誤って、迂闊にも世界で唯一現存していた循環型社会に幕を降ろしてしまった。

* * *

使い捨てにすっかり慣れてしまった現在のものづくりは、修理することなどハナから考えていないから、いざ修理するとなるといろいろな問題が出てくる。

例えば、顧客が今のサービスに満足しているかとなると、大いに疑問がある。

4年前にカミさんにプレゼントしたデジカメが、故障した。

購入した大型電器店に修理を依頼して、待つことしばし、一週間ほど経って電話で見積り金額が示されたので、修理を依頼した。

後日、修理されたカメラは、修理代9,300円と引き換えに手許に戻ってきたのだが、一、二回使ったら同じところが機能しなくなってしまった。

カミさんは「機械物だからアタリハズレがある。買い替えましょう」と言ったけれども、再度同じ店に修理を出して、すでに一週間ほどになる。

この数年、わが家では、テレビと洗濯機の修理をしたが、いずれもその対応には満足していない。

* * *

一方で、修理をする職人にも大きな負担をかけている。

諏訪マニュファクチャリング研究会*のメンバー20名と長野県岡谷技術専門校を訪ねて、自動車整備の実情を見学させてもらったことがあった。

ここで見たものはエンジン周りには手を入れる隙間もないほどに詰まっているたくさんの機器で、一目して修理が難しくなっていることを知った。

そういうこともあって「分解まで考えたものづくり」の研究が始まっている。

インバース・マニュファクチャリング**と呼ばれている領域で、いずれこのことについても書くつもりである。

* 2002年11月に諏訪東京理科大学で行われた産学公連携に向けたフォーラムで、ぼくが「リビルド産業による地域産業の振興」をテーマに講演をしたことがきっかけとなって設立された。2003年4月から一年間活動して【Remanufacturing2004報告書】を出している。

** 手頃な本では梅田靖編著【インバース・マニュファクチャリング】（工業調査会、1998年刊）や、山際康之著【リサイクルを助ける製品設計入門】（講談社ブルーバックス、1999年刊）がある。

「次世代物流コロキウム」実施報告(第1回～第3回)

	人数	参加者		
		Visitor		Staff
第1回	22人			
日時 2011年11月11日(金)18:30～21:00		一山 幸市	スナックフード・サービス㈱ 常務取締役	小林勝美
議題 卸売の動きを分析すれば、企業が向かうべき方向が見えてくる		名古屋 和明	ブラネット物流㈱ 事業推進部 部長	津久井英喜
講師 寺嶋 正尚氏 (産業能率大学 経営学部准教授 (財)流通経済研究所 客員研究員)		伊藤 健司	ブラネット物流㈱ システム部 マネージャー	藤田 豊也
司会 小林 勝美氏 (次世代物流調査ワークショップ事務局長 ㈱APT 監査役)		大塚 幸男	㈱日成 副主幹	
場所 豊島区民センター4階6号室		久保 基	㈱日成 営業課長	
		岡田 章一	エステー㈱ 参与	
		勝川 幸	日本セパレートシステム㈱ マネージャー	
		川上 大介	山崎製パン㈱ 部長	
		近藤 修司	㈱ケーズエンジニアリング 社長	
		鳥田 茂	東邦科学㈱ 社長	
		高木 規仁	㈱コーエックス 代表取締役	
		高山 英人	㈱ロジコンシェル 企画開発マネージャー	
		田中 喬	田中企画㈱ 顧問	
		中谷 祐治	ロジソリューション㈱ 部長	
		野澤 良彬	光英システム㈱ 顧問	
		柳橋 裕正	日本コバック㈱ スーパーバイザー	
		小松崎 克正	㈱エム・ケー・ワイ・エコ 顧問	
		井上 良太	㈱APT 代表取締役社長	
		田島 聡	㈱APT 営業部長	
第2回	19人			
日時 2012年2月9日(木)18:30～20:30		久保 基	㈱日成 営業部 課長	小林勝美
議題 中国サイドから見た日本企業の中国進出		丸山 暁史	㈱日成 課長代理	津久井英喜
講師 町田 一兵氏 (明治大学 商学部専任講師・商学博士)		岡田 章一	エステー㈱ 参与	藤田 豊也
司会 寺嶋 正尚氏 (産業能率大学 経営学部准教授 (財)流通経済研究所 客員研究員)		川上 大介	山崎製パン㈱ 物流部 製品管理課	
場所 豊島区民センター4階5号室		小松崎 克正	㈱エム・ケー・ワイ・エコ 顧問	
		近藤 修司	㈱ケーズエンジニアリング 社長	
		高木 規仁	㈱コーエックス 代表取締役	
		田中 暉大	スナックフード・サービス㈱ 物流ソリューション部	
		田中 喬	田中企画㈱ 顧問	
		土器園 歩	エスコット㈱ 代表取締役	
		名古屋 和明	ブラネット物流㈱ 事業推進部 部長	
		野澤 良彬	光英システム㈱ 顧問	
		堀 吉彦	堀 流研事務所 代表	
		柳橋 裕正	日本コバック㈱ スーパーバイザー	
		渡辺 重光	㈱フレームワークス 代表取締役会長	
		寺嶋 正尚	産業能率大学 経営学部准教授	
第3回	12人			
日時 2012年5月10日(木)18:30～20:30		一山 幸市	スナックフード・サービス㈱ 常務取締役	小林勝美
議題 物流ビジネスと電力供給危機 ～太陽光発電でピンチをチャンスに!～		久保 基	㈱日成 営業部 課長	津久井英喜
講師 小松崎 克正氏 (㈱エム・ケー・ワイ・エコ 顧問)		高木 規仁	㈱コーエックス 代表取締役	藤田 豊也
司会 町田 一兵氏 (明治大学 商学部専任講師・商学博士)		田中 隆弘	㈱ワールド・ブレインズ 営業開発部 部長	
場所 豊島区民センター4階5号室		名古屋 和明	ブラネット物流㈱ 事業推進部 部長	
		花房 陵	㈱イーソーコ総合研究所 主席コンサルタント	
		福田 利昭	コーワ㈱ 特販室 室長	
		堀 吉彦	堀 流研事務所 代表	
		町田 一兵	明治大学 商学部専任講師	

なお、今回のコロキウムは“自動倉庫のリニューアル”の㈱APTの寄附講座として実施しました。



50音順で表記。スタッフは苗字のみ、敬称略。

==事務局日誌(4月度)=====

10日(木)14:00-16:30—「物流戦略を考えるサロン」(第54回、野澤良彰)は、好評の「江戸に学ぶシリーズ」の4回目で、今回のテーマは「江戸の街と暮らし」。60分間の素晴らしい解説の後、Visitorの名古屋和明(プラネット物流、一山幸市(スナックフード・サービス)とStaff(津久井、藤田、小林)を加えた6名で、「未来のために江戸の循環型社会から何を学べるか?」について考えて、大いに盛り上がった。

18:30-20:30—「第3回次世代物流コロキウム」は、「物流ビジネスと電力供給危機～太陽光発電でピンチをチャンスに～」と題して、小松崎克正氏(エムケーワイエコ・顧問)の講演。参加者は、一山幸市(スナックフード・サービス)、久保基(日成)、高木規仁(コーエックス)、田中隆弘(ワールド・ブレインズ)、名古屋和明(プラネット物流)、花房陵(イーソーコ総合研究所)、福田利昭(コーワ)、堀吉彦(堀流研事務所)、町田一兵(明治大学)とStaff(津久井、藤田、小林)の13名。このテーマに最も旬な講師を迎えただけに、町田先生の司会のもとで、日本のエネルギー政策にも関わる熱のこもった質疑応答、突っ込んだ意見交換が行われたが、PR不足が悔やまれた。

17日(木)14:00-16:00—「物流戦略を考えるサロン」(第55回、津久井英喜)は、Visitorの田中喬(タナカ企画)、Staff(小林)の3人で、「いかにして問題を認識するか?」について。

22日(火)14:00-16:00—「物流戦略を考えるサロン」(第56回、野澤良彰)は、「江戸の循環型社会について」。木曜日に都合のつかない方の為のアンコール企画であったが、PR不足と生憎の悪天候が加わりStaff(津久井)相手の講義となった。

24日(木)14:00-16:00—「物流戦略を考えるサロン」(第56回、前田健太)は、「労働者派遣法の改正」について前田健太氏(ウイズ)から解説と問題提起の後に、Visitorの田中喬(タナカ企画)、名古屋良明(プラネット物流)、堀吉彦(堀流研事務所)とStaff(津久井、小林)の計6名で意見交換を行った。

31日(木)14:00-16:00—「物流戦略を考えるサロン」(第57回、藤田昱也)は、「日本の港湾(後)」で今回は国際競争力を中心に、藤田(研究担当Staff)から解説と問題提起があり、これを受けてVisitorの田中喬(田中企画)、堀吉彦(堀流研事務所)、名古屋和明(プラネット物流)、野澤良彰(光英システム)とStaff(津久井、小林)の計7名で意見交換を行った。

(文責、小林)■

==スタッフ後記(50音順で表記)=====

小林勝美(事務局長)◆先の「第3回次世代物流コロキウム」(5月10日)で小松崎克正氏から「物流ビジネスと電力供給危機」と題して、「倉庫業は太陽光発電でピンチをチャンスにしよう」という趣旨の話を伺いました。私自身が今、物流企業を訪問して太陽光発電システムをお勧めしている身なので、たいへん勉強になりました。企業の経営者・ご担当者の皆さんとお会いして、国が打ち出した「再生可能エネルギーの全量買取制度」をしっかりと紹介させて頂いているのですが、皆さんが導入に対して実に様々なお考えをお持ちのことに驚いています。いずれ整理してご紹介したいと思います。(APT 監査役、元・曙ブレーキ工業)

津久井英喜(編集担当)◆社会科学・人文科学の素養を欠く者にとって「環境と開発」とか「環境と経済」といったテーマの勉強にはひどく疲れる。経世済民の学といわれる「経済学」では「経済格差の是正」や「環境と経済発展の両立」をどう解決しようとしているのか、そこが知りたい点なのだがその解になかなかたどりつけない。否、たどりつけないどころか、ますます遠ざかっていくようにさえ思えてくる。第一、資源に限りがあるのに、無限の成長を期待している理屈が僕にはどうしても分からない。困ったものだ。(首都圏流通機構 顧問、元・諏訪東京理科大学)

中村奎吾(渉外担当)◆この頃はもっぱら若手事業家とのコラボレーションに取り組んでいます。今取り組んでいる事例は、30代の社長が全国の農産物のアンテナショップと話をしたいで、それをロシア・中国向け委託販売で実績のあるセンコン物流(仙台市)のロシア・中国ルートにのせて輸出しようというプロジェクトです。年寄りの強みは「人脈」ですが、若手の強みは「やる気」です。今後とも「やる気」のある若手を探し出して、支援していきたいと考えています。(拓洋 顧問、元・曙ブレーキ工業)

藤田昱也(研究担当)◆長いことコンサルタントとして「流市法」適用流通団地の建設に関わってきました。先日、津久井さんに同行して首都圏流通機構(八王子市)をお訪ねしましたが、かつてここは私自身が「企業進出意向調査」を行い、「実現性あり」と報告した所です。10年ぶりに北條貴徳社長(90歳)にお会いし、懐かしさとともに、ここ圏央道八王子西IC周辺の超巨大開発が実現の一步をようやく踏み出したことを確認できました。その一方で、恵まれた大自然にも改めて深く感動しました。現在、多くの巨大流通団地は時代のニーズと乖離したハコモノに墮しています。そうさせないためにも、次世代・次々世代のニーズを充分に先取りした検討をして欲しいものだと思います。(千葉商科大学大学院・講師、元・日通総合研究所)